

## 2 「みんなでできる、楽しく学べる体育の授業」を実践するために

### (1) 器械運動との関連を考慮した「体ほぐしの運動」

器械運動の中には、日常生活ではなかなか体験できない動きがあります。体を動かして遊ぶ機会が少ない近頃の児童にとって、器械運動に親しみ、新たな技ができるようになるためには、十分にアナログン※1に触れておくことが大切です。そこで、器械運動のアナログンを含む「体ほぐしの運動」を考えてみました。

また、体育の学び方には、お互いの動きを見合うこと、教え合うこと、補助することなどがあります。このような学び方を身に付けさせるために、児童相互の関わり合いを深める動きも取り入れることにしました。

※1 児童が、まだやったことのない運動を行おうとする時に、その運動を思い浮かべることができる類似した運動のことです。

跳び箱運動のアナログンとしては、全体的な動きが類似している「馬跳び」、部分的に（踏み切り感覚が）類似している「ケンパー」などが挙げられます。

### (2) 「体ほぐしの運動」を生かす指導計画の工夫

単元の構想（総時数…12時間）

時分	1・2	3・4・5・6・7	8・9・10・11・12
15	オリエンテーション	「体ほぐしの運動」 (マット運動と跳び箱運動の共通なアナログン)	
30		「マット運動」 (集団的な動き)	「跳び箱運動」 (技と跳び方の難易度による点数化)
45		発表会	競技会

体を動かす楽しさを十分に味わわせる。アナログンに触れさせる。児童相互の関わり合いを深める。以上のために単元前半の「体ほぐしの運動」の時間配分を多く設定しました。

マット運動と跳び箱運動の両方のレディネステストを行ったり、「体ほぐしの運動」や集団的な動きを紹介したりと内容が豊富なため、2時間扱いとしました。

各班で工夫した取り組みを紹介し合えるように、マット運動では発表会を行うようにしました。

児童相互の関わり合いが深まったことを生かすため、跳び箱運動では班対抗の競技会を行うようにしました。